

# 第24回「海の香りのする詩」

海をテーマにした「海の香りのする詩」の受賞作品が決定しました。小学校から236点、中学校からは383点の応募があり、次のみなさんが入賞しました。

教育委員会生涯学習課 ☎ (25) 1268

小学生の部

大賞

「しろんご浜から見るとじいちゃんの家」

木下 開陽（安楽島小学校6年）

じいちゃんは海が好きだ

菅島のしろんご浜で一緒に散歩

海を見ながら魚の話の話を聞く

アジ、イナダ、サワラの釣りの話

「一緒に釣りに行く。」

「こんな大きなのが釣れるよって。」

「ぶっと引かれたら手がちぎれるんやぞ。」

そんな話をするじいちゃんが大好きだ

あるときじいちゃんは漁に行けなくなった

脳こうそくという病気で倒れた

入院中は釣りに行きたくて糸結びの練習

でも歩くのがゆっくりにゆっくりになった

じいちゃんの宝物の船も売ってしまった

それでもじいちゃんは海へ行く

そしてしろんご浜から船を見つけた

「こんな大きなのが釣れるよって。」

「ぶっと引かれたら手がちぎれるんやぞ。」

「大きくなったら一緒に魚釣りに行くか。」

じいちゃんはほくくうう

「イナダもタイもサワラも釣ったるわ。」

「釣りに行きたいんか。」とぼくが聞くと  
「今は大好きな海のそばで散歩や。釣り  
ばかりの時は気づかんだ山の花を見なが  
らな。」

大きくなったらじいちゃんを船に乗せる

「こいでアジが釣れるんやぞ。」

「イナダ、釣りに行くか。」

「サワラやで伊良湖水道まで飛ばせ。」

うれしそうなじいちゃんの声を乗せる

じいちゃんは海を見ながら今日も

「かい、海はいいぞ。」

「イナダはこんなに引くんやぞ。」

じいちゃんの傷だらけの手

しわくちゃになって笑う顔

今日もうれしそうに海の話

じいちゃんを元気にするのがぼくの夢

## 選評

応募作品から、鳥羽の子どもたちは、日々の生活の中にも、心の中にも海があり、その海を家族や人のつながりを通して見ていることが伝わってきます。「見て、聞いて、触れて」全身で感じたことを素直な言葉で表現しています。鳥羽の海を思い浮かべながら選び抜かれた一つ一つの言葉が、作品に触れた人の心に響き、その時の情景が浮かんできて声も聞こえてきそうです。

また、どの作品も、海を通して感じたことをきっかけに、少し先の未来の成長した自分へのメッセージと決意が思い描かれています。短かった夏の限られた時間の中で、子どもが感じた素直な思い、一瞬の輝きを見つめる鳥羽の海のようなあたたかさを大切に育てていきたいと思いました。

### 小学生の部（大賞）

海の好きなじいちゃんが語る言葉を、じっと聞いている。

釣りに行けなくても、釣りや海の魅力を繰り返し語るじいちゃんの姿に、作者の決意が固まっていって。大好きなじいちゃんを、大好きな海に船に乗せていく。そして、僕が元気にするという夢を発見する。ここに、少し先の自分を思い描いた開陽さんのやさしさとたくましさを感じました。

### 中学生の部（大賞）

家族の中での自分の役割を自覚し、毎年ワカメづくりに意欲的に取り組んでいる。少しずつ「一人前」に近づいていく自分の姿と仕事のステップアップの重なりがうれしく、そこに健太郎さんの成長が見えてくる。

答志のワカメに誇りを持ち、新しい仕事での達成感を伝えながらも、まだまだ成長したいという意欲と先を目指す力強さが伝わってきました。

（選考委員長 齋藤 隆彦）

「昇格〜一人前を目指して〜」

濱口健太郎 (答志中学校3年)

今年もわかめの季節がやってきた  
メカブそぎ歴九年目  
九年目になるとメカブを手際よくそげる  
だけだ

今年でメカブそぎとはおさらばだ

父に与えられた新たな仕事

それはそいだメカブを洗う仕事だ

エンジンポンプで水を吸い上げメカブを洗う  
すごい水圧だ

しつかり持つていないとホースが暴れる

母と意思疎通しながらメカブを洗う

一か二かごこ:

さすがに疲れも出てくる

できあがったメカブは輝いている

これが僕の新しい仕事だ

しかしまだ一人前ではない

本当の一人前はワカメを刈る仕事だ

ワカメの世界はとても厳しい

九年たつてもまだ一人前ではない

家族を背負うほどの一人前

来年こそは一人前

僕はこれからも一人前を目指す

その他の受賞作品は次のとおりです。

小学生の部

伊良子清白賞 「勇ましいじいよ」木下朝陽 (菅島小6年)

入賞 「ところてん」城山亜衣 (鏡浦小6年)、「海底の忍者」松口七海 (菅島小5年)、「オラの兄ちゃんはずり人だ!」野村憲吾 (弘道小5年)

奨励賞 「やっぱり敵わない」濱口晴翔 (加茂小5年)、「オラのばあちゃん 日本一!」小崎博斗 (弘道小5年)、「もくもくと」山本暉喜 (加茂小6年)、「私の大切な 菅島の海」中村柚香 (弘道小6年)、「海女と海」小久保瑞希 (神島小6年)

中学生の部

伊良子清白賞 「六年ぶりの釣り」木村友環 (鳥羽東中3年)

入賞 「海の子」濱口大和 (鳥羽東中1年)、「舟の掃除」岡田翔 (神島中1年)、「静かな夜に輝く海は」西井もか (鳥羽東中1年)

奨励賞 「海と私」石川結捺 (鳥羽東中2年)、「真珠」鎌谷聖音 (鳥羽東中1年)、「いけすのイワシ」濱口知里 (加茂中1年)、「私の好きな海」河村奈寧美 (加茂中1年)、「海の風」武中智咲 (鳥羽東中1年)

みなさんの作品は、受賞作品集として編集し配布する予定です。  
※敬称略

鳥羽・海藻文化革命  
岩尾博士の  
海藻博物記

vol.16

~海の変化のはなし~

水産研究所 ☎ 25 3316



坂手島東岸の毛牟茂浜の様子



普段みかける海藻がいなくなった潮だまり

令和元年7月号の広報とばで、坂手島港内にわずかに残されたアマモのことを書いたが、現在進行中の漁港整備工事によりこれらは失われた。誤解しないでほしいが「工事のせいではない」ということを訴えたいのではない。長年、研究所がお世話になった坂手島の沿岸の生物環境の変化をお伝えしたかったのである。同年の9月号では坂手島で失われて20年は経過する天然のサガラメを2本ほど見つけたとお知らせしたが、今秋に潜水調査をしたところ、消失

しており、そのほかはしつかりと茂っていた坂手島東岸部の海藻もほとんど失われていた。ヨレモクというヒジキなどの仲間の海藻がお花畑のようになっていた場所もその荳だけに減っていた。カジメも貧弱ながらも林のようになっていたがこれらは荳もなくなっていた。ところてんの原料になるマクサ(てんぐさ)もほとんど失われていた。磯を歩いてもいつもながら生えているはずの下草海藻がほとんどなく、若いヒジキがいくらか生えているくらいであった。海水温の上昇や懸濁物の増加、魚による食害などの影響が考えられるが、対策はない。これは坂手島でだけ起こっている現象ではない。答志島や小浜、石鏡でも確認している。海藻豊かな鳥羽の海にも「磯荒れ」の足音がしつかりと聞こえている。とにかく私が目当たりにした変化をお伝えしたかった。